
聖マルコ教会建物保存と歴まちびとの関わりについて

Regarding the preservation of St. Mark's Church and its relationship with Nagoya-Rekimachibito.

山田美紀子 (なごや歴まちびと)
Yamada Mikiko (Nagoya-Rekimachibito)

名古屋城から徳川園までの界限には、江戸時代から明治、大正、昭和へと名古屋の近代化を伝える建造物が多く残っています。このエリアは「文化のみち」と呼ばれ、一年を通して観光客が訪れ、季節ごとにイベントが開催されたりして、人々にとても親しまれています。



「文化のみち」の中心部である白壁・主税・榑木町並み保存地区から、国道 41 号を挟んで西側に位置している場所に由緒正しい木造教会があります。これが日本聖公会名古屋聖マルコ教会（以下「聖マルコ教会」と称する。）です。カナダ聖公会のマーガレット・M・ヤング宣教師が 1899（明治 32）年に立ち上げた名門の柳城幼稚園に隣接しています。

私が今回、聖マルコ教会の耐震改修計画を

担当させていただくことになったのは『なごや歴まちびと（名古屋歴史的建造物保存活用推進員の愛称）』として仲間と共に派遣され、聖堂の耐震についてご相談を受けたことが始まりでした。私たちは、歴史ある建物の耐震補強や修復についての専門知識を持った建築士です。ご相談を受けた際に、耐震補強には高額な費用がかかりそうなので、建替え（新築）や減築をご検討されている事をお聞きし、聖マルコ教会の皆さまが状況を正しく理解した上で、今後、聖堂をどのようにしたいのか判断することが大切なのではと強く感じました。また、改修工事について正しく理解されないまま、貴重な教会の建物が失われていくことは、私たちにとって耐え難いことでした。

『なごや歴まちびと』として劣化箇所の指摘と、①耐震診断を受けて現状の評点を知ること。②耐震補強設計をもとに見積書を出すこと。をご提案させていただきました。耐震改修の費用は、補強プランを作成し、プランに基づいた見積書を出すことで把握できます。

しかし、ご提案したからといって、すぐに

耐震診断へ…とはなりませんでした。木造住宅以外の建物には診断費用が必要になるからです。耐震診断は派遣業務には入っていません。

派遣報告後しばらくして、聖マルコ教会のご担当者様より「次回の信徒総会で聖堂を新築するか、減築するか決めることになりました。」とご連絡をいただきました。耐震改修は具体的なプランが無く、見積書も無いため総会の土俵に上がることができません。

私は聖マルコ教会と「文化のみち」についてより深く考えました。今までに注目をされたことは少ないかもしれませんが、「文化のみち」には、カトリック主税町教会（カトリック）、日本聖公会名古屋聖マルコ教会（中道：カトリックとプロテスタントの懸け橋となる教会）、日本福音ルーテル復活教会（プロテスタント/ルター派）という、世界的に伝統がある3つの教会（教派）が存在しています。キリスト教には教派があり、その違いによって建物にも特徴が表れています。このことを実際の建物を巡りながら学べば、歴史ある教会建築の知識を身につける教材となります。伝統あるキリスト教会の正しい姿を多くの方々に観ていただくことは、教会と関わる皆様にとっても大切なことと思います。

どう考えてみても聖マルコ教会聖堂は「文化のみち」に必要な建物だと思い至りました。費用のことはさておき早急に補強プランを

作成し、なごや歴まちびとの仲間である建設会社に見積書を作成していただき、何とか信徒総会で行われるプレゼンへ参加することができました。工事費では第2位。最安値から1,000万円程の差がありましたが、お伝えしたい内容は全てプレゼンへ込めて結果を待ちました。後日、耐震改修をして聖堂を使い続けていくことに決定したとご連絡をいただきました。聖マルコ教会の皆様も建物に愛着があり、地域にとっても大切な教会建築であることをご理解いただけたことが分かりました。今もなお、教会の皆様へ感謝の思いが溢れてきます。

ここで聖マルコ教会の建物の特徴・魅力をあらためて記すことにします。名古屋聖マルコ教会はゴシック様式の木造教会です。ゴシック様式は12世紀から15世紀にかけて教会堂を中心に全ヨーロッパへ広がった建築様式で、19世紀に再流行した影響により、日本では明治期の教会建築へよく用いられました。

ブランク四葉形(くり抜き四つ葉飾り)

葉状装飾はフォイルと呼ばれ、初期イングランド・ゴシック様式を色濃く反映しています。クローバーのくり抜き飾りは、ゴシック建築によく用いられており、葉の枚数により意味合いがあります。四葉形（四つ葉飾り）は、4つの福音書（マタイ、マルコ、ルカ、

ヨハネ)を象徴するものと考えられ、三葉形(三つ葉飾り)は、三位一体なる神を象徴するものと考えられています。



引違窓に尖塔形のレリーフとブランク四葉形を組み合わせて、トレーサリー(窓装飾の名称)を設えています。比較的シンプルなデザインですが、これはゴシック建築を代表する特徴です。

ハンマービームトラス

構造についての特徴は、天井が張っており一部分しか見ることはできませんが、ハンマービームトラスを使用している点です。ハンマービームは、ホール建築や教区教会堂を中心にイギリスで好まれて用いられた屋根架構の様式です。明治初期に持ち込まれた洋建築の構法は、日本の大工により和の技術を工夫して建築されることがありました。聖マルコ教会のトラスも同様の工夫が見受けられます。

フレームについてもイングランドのボックス・フレーム構法を思わせる方法がとられ

ています。



日本の在来軸組工法では3尺(約0.91m)ピッチで柱を立てることが基本となりますが、聖マルコ教会では9尺(約2.73m)ごとに柱を立てています。ボックス・フレーム構法では6フィート(約1.8m)から20フィート(約6m)の間隔で柱を立てるため、洋建築の構法を意識して建築しているのではと思われます。

ハードボードの腰壁と家具

ハードボードはファイバーボードの一種です。1898(明治31)年、英国において木材の繊維をバラバラに解離し、これを原料とした硬質のボードが世界で初めて工業的に生産されました。第2次世界大戦後には世界的な木材資源の不足により、木材工場の残廃材を原料とした製品が飛躍的な発展を遂げ、当時の日本では外国プラントの輸入によるものが製造されており、羽目板、天井板、床板、家具、建具、キャビネット等に使用されました。聖マルコ教会には、建築当初1956(昭和

31) 年時の状況を伝える貴重な要素としてハードボードの腰壁と家具が現在も残っています。2018(平成30)年に歴史ある教会建築巡りツアーを実施した際には、聖マルコ教会の腰壁を愛おしく観察する参加者の姿もありました。



今回の耐震改修工事では、すでにある魅力的な部分をできる限り残し、構造用合板や筋かい等木質材料を用いて補強を行います。土台、柱、梁の接合部で大きな引抜力がかかる所には、柱頭柱脚金物を用いて各部材が外れないように緊結し、評点 1.0(大地震時に一応倒壊しない)を満たす建物にします。

改修後の活用については、今まで通りに毎週礼拝を守り続けることに加え、地域で行われるイベントへ積極的に参加します。『なごや歴まちびと』としては地元でご活躍されているガイドボランティアの皆様とご協力をして、教会建築巡りツアーを定期的に行うことが出来たら・・・と考えています。明治時代を迎え、西洋文化が浸透していく過程で、名古屋の産業の発展とキリスト教会の成長は

接点があるのではと思います、現在調査中です。発見があれば、教会建築巡りツアーで発表していきたいと思います。

[了]

名古屋聖マルコ教会 建物概要

竣工	1956(昭和31)年
構造	木造2階建
屋根	金属板葺(竣工当初時は瓦葺)
外壁	モルタル塗りシン仕上げ
設計	大野信雄一級建築士(教会員)

[Sep.2023]